

鮭漁は北海道開拓の歴史、文化発展の源だった。

◆蝦夷地開拓と鮭漁

今から400年ほど前の江戸時代初期、幕府(政府)は当時蝦夷と呼ばれた北海道に注目、日本最北の松前藩を現松前町に置いた。

未墾地で米のとれない蝦夷地、松前藩の財政基盤は弱く、それを克服するためにアイヌの人々との交易を進めながら一族や家臣たちに沿岸の漁場開拓と漁業の振興を命じた。鮭や鮭、昆布、あわび、なまこ等の豊富な海産物を本州に移出し、本州から米、味噌、酒、衣類等、様々な生活物資を移入して藩の体制を保った。

漁場は年を追ってひろがり江戸後期には、その中心を寿都、岩内、泊、積丹半島、忍路、高島へと拡大していく。

その後、家臣たちは、商人に漁場を請け負わせ税金を取り立てた。漁網や漁具類を発達させ、刺し網、ざる網、行成網、建網などと大型化し、漁獲高を飛躍的に高める。小樽の忍路・高島地区の一網元の漁獲高は1万石(約7,500t)今の価格で20億円を超えたという。

鮭漁を営むためには、多くの労働力を要した。網元はその多くを東北や北陸地方に求め、漁が始まる3月には多くの漁夫が集められた。網元の中には200人以上の漁夫を集める者も現れ、彼らの宿舎を兼ねた網元の家は大型化し、豪放さの中にも繊細な建築美も兼ね備え、その美しさから鮭御殿と呼ばれるようになった。

明治2年(1869)7月、明治政府は、政府内に開拓使を開庁し、蝦夷地を北海道と改称、10月には小樽の銭函に開拓使役所を設置して北海道開拓を本格化する。明治13年(1880)には日本で3番目の鉄道が小樽-札幌間、さらに明治15年(1882)には予定されていた幌内(現 三笠市)まで開通し、小樽港からの石炭積み出しが本格化した。このように鮭漁は200年以上も続き北海道の歴史そのもの。北海道の開拓に大きな役割を果たし、産業の発展、文化向上に貢献した。



浜辺に運ばれたニシンの卸

◆一航海千両の利、北前船

蝦夷と本州の物資輸送にあたったのが「北前船」、船体は長さ約28m、幅約8m、高さ約2.5mほどの大きさだった。

大阪を出発し日本海各港で買い込んだ米などの食料品や木材、衣類などを運び、帰りは鮭粕や身欠鮭、昆布などの海産物を積み、一航海数千万円(現在価格)の利と言われた。



北前船

●シャクシャインの戦い、寛文9年(1669)、鮭漁を営む武士たちがアイヌの人たちを諸使、生活を脅かしたことから、不満が暴発。現在の日高地方を根拠にしていた大酋長シャクシャインが同族に決起をうながし、ゲリラ戦を展開。一方幕府からの命令で津軽藩が出兵、鉄砲で攻撃、多数の死傷者を出す大騒動に発展した。

●また1789年頃、松前江差方面の鮭漁が不漁続きなのは、遠方の小樽、日高地方の漁師が禁じられている大型の網を使っているからだとなり、100以上の漁船で北上。古平、忍路で鮭網を次々と切り裂いた。これを迎え撃つ地元漁師100人余が船で追ひ、首謀者3~4人を捕まえたという記述もある。

鮭は「魚に非ず」 江戸時代、武士の俸禄(給料)は米で表された。しかし、日本最北の藩であった松前藩には、家臣の俸禄に見合うだけの水田がなく、その代わりに豊富な魚貝類を活用した。ニシンはその代表的な産物であったことから、魚として扱わず、米(給料)として扱う意味から鱒(魚に非ず)と書いた。鱒は硬骨魚、体長35cm、北方の海を回遊。春、北海道沿岸で産卵する。食用、肥料に利用される。卵は数の子、美味で知られる。



ニシンの網起こし

北海道・小樽市の歴史の変遷

慶長9年(1604)	江戸幕府が松前藩(現松前町)を開設。アイヌ人との交易、漁業振興を図る。
寛文9年(1669)	シャクシャインの戦い起る。
慶応2年(1866)	小樽に住んでいた僧侶・定山和尚が朝里地区から山越え踏破。札幌豊平川上流に温泉を発見する。現在の定山溪温泉。
慶応2年(1866)	手宮洞窟の彫刻(陰刻画)発見。今から1600年ぐらい前に、岩に人や動物の画を刻んだもので、誰が何を目的に残したのかは不明。国指定史跡。
明治2年(1869)	維新の後、明治政府は札幌に開拓使(役所)を置き、「蝦夷」を「北海道」とし、「オタルナイ」を「小樽」と改める。また鮭漁の場所請負制度も廃止される。
明治15年(1882)	小樽-札幌-幌内(現三笠市)間に、わが国三番目の鉄道が完成。小樽港から石炭の積み出しが本格化した。
明治26年(1893)	日本銀行派出所が小樽に開設。
昭和30年(1955)	このころから鮭の群衆が見られなくなった。
昭和33年(1958)	小樽市祝津に、泊村に在った鮭御殿を移築。
昭和35年(1960)	北海道指定有形文化財に指定される。

